

発行日 2007年4月20日(隔月20日発行) 通巻259号 1982年6月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター 会報
トライアル・アンド・エラー(試行錯誤)

Trial & Error

No.259

May-June 2007

特集 パキスタン・インド地震被災者支援活動報告

トイレができて、病気が減った。

毎年恒例!

JVC STAFF 2007

報告

南アフリカの活動における協働団体の不正会計に関して

＜写真：トイレの排泄槽となる穴を掘るパキスタンの住民＞



Japan International Volunteer Center

特集 パキスタン・インド地震被災者支援活動報告

トイレができて、 病気が減った。

2005年10月8日、パキスタン・インド国境の山岳地帯を襲った地震は、多くの人命を奪い、残された人々の暮らしにも壊滅的な打撃を与えた。地震の直後から現地に入り支援を続けてきたJVCは、07年1月、活動を終了させた。この間、試行錯誤を繰り返しながら、人々の暮らしにとって最も切実なトイレ作りに活動を絞り込み、住民とともに汗を流し、被災地の衛生環境の確保・向上を目指してきた。その過程を報告する。(編集部)



「はい、こちら」

トイレの「JVCです」

元パキスタン現地調整員
(現アフガニスタン現地代表) 藤井 卓郎



■藤井プロフィール
パキスタンおよびアフガニスタン滞在歴十年。〇六年二月から現地調整員として被災地であるパキスタンの山を歩き回った。同十月からアフガニスタン現地代表に。以前ベシヤワール会に所属して関わっていた医療事業に再挑戦中。

■山間の村を襲った悪夢

JVCパキスタン事務所のあるバタグラムから前進基地のあるアライ郡のラッシュヤング村に向かうには、渓谷をひたすらさかのぼる。夕暮れ時には、道の上に覆いかぶさるように迫る崖とそこに生えている木々が、逆光の中で水墨画のような景色をつくる。雨に遠景が霞む日はなおさらだ。このあたりはインド洋からの風がカラコルム山脈に当たる前に雨を振り落とすところで、遥かインダス河の水源ともなっている。

二〇〇五年十月八日の地震が襲ったカシミールからパキスタン北西部の地域はこうした山岳地帯である。今までほとんど地震がなかったこの地方を襲った今回の地震は、家々を破壊し、多くの住民を下敷きにしてしまった。バタグラム県は被災地の北辺にあたり、被害は比較的小さい地域とされているが、それでも死者三千五百六十四人、負傷者一万一千五百五十四

■援助の功罪

人、全半壊家屋六万九千五百三十三軒(県役場まとめ)に上った(人口は三十六万六千七百七十人/国連人道情報センタまとめ)。

私がバタグラムに着任した〇六年二月には、既に被災者の援助依存が問題となっており、パキスタン政府は四月末での避難民キャンプの閉鎖を決定した。キャンプを整備し、援助を充実させればさせるほどキャンプは人々を惹きつけ、避難民が増えていく。地震直後には、とにかく被災者に衣食住を与えてその命をつなぐことが必要である。しかし、こうした緊急支援は数週間から数カ月でその役割を終える。緊急援助は時間との競争で、とにかく必要な物量を被災地に投入することで、多少の無駄には目をつぶる。住民の参加や自立の視点はあまりない。こうした援助は、打ち切るタイミングが遅れると大きな副作用をもたらす。そうした援助の失敗例として、

今回のトタン板配布がある。誰も彼もがトタン板配布を行なったため、板がだぶついて闇に流れるまてになっていた。JVCも当初トタン板配布を試験的に試みたが、この状況を見て配布を停止し、活動を仮設トイレ支援に絞った。

■心を鬼に「穴を掘ろう！」
政府による住宅再建補助金の分配が始まった五月ごろから、被災者が村に帰り、自分の家の再建とともに地域社会のトイレへの関心も高まってきた。「トイレもないテント生活で、家の周りが大便だらけになっちゃったんだよ。一日も早くトイレをつけてくれないか」。

JVCのやり方は住民参加型、モニタリング&アフターケア重視である。トイレ利用者はJVCと約束を取り交わし、排泄槽となる深さ十フィート(約三メートル)の穴を自分で手掘りする。排泄槽の深さはトイレの寿命を決定する重要な要素であるため、この掘削をトイレ部材の提供条件とした。JVC

2005年10月8日、地震発生

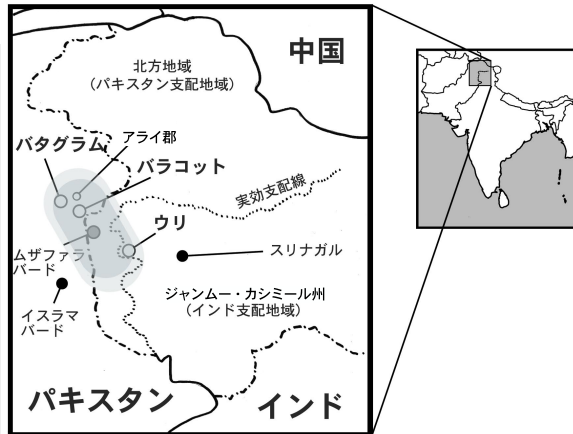
初期(緊急): 05年10~11月

冬を越すためのテント、毛布、薪ストーブ、仮設住宅の建築資材を提供。



中~後期: 05年11月~07年1月

衛生環境の確保・向上のため、仮設トイレを住民と協力して設置。



震源地: ムザファラバード付近
地層の断層線の関係で、被害はパキスタンとインドの両国にまたがってだ円形に広がった。

支援内容の詳細は5ページをご覧ください。

■信頼なくして進展なし

村に入って最初のうちは、なかなか十フィートの穴を掘ってもらえない。これは一般的な基準ではあったが、実際は手間を惜しんで簡単に部材を配布してしまうNGOが多く、JVCが質の点で妥協しないということを理解してもらうのに時間がかかるのである。

また、被災者の多くは、幾多のN

Cのフィールド・ワーカーたちは巻尺を常に携行し、心を鬼にして十フィートにインチ(約センチ)足りなくてもOKを出さなかった。石の多い山の地面に穴を掘るのは容易でない。ツルハシとスコップで掘り進み、石にぶつかったらハンマーとタガネ、ツルハシなどで碎いて取り除く。大きな石に当たったためにダイナマイトを使った人もいた。こうして十フィートの穴を掘り終わるころには、利用者の手はマメだらけになり、設置したトイレは俺のもの、大事にしよう、という意識が芽生える。

■「支援」から生まれるもの

○七年一月の事業終了までにラッシャング村とその周辺数カ村で二百三十五基の家庭用トイレを設置した(事業全体では千九百九十六基)。JVCのコーポレート・カラーである青を建屋の色に用いたため、緑の谷間の至るところに青いトイレが認められるようになった。

ラッシャング村の診療所の記録によっても、トイレ設置の衛生面

GOがやってきては途中で仕事を放り投げて去って行ったことから、裏切られた記憶を持っている。前線基地を設けてスタッフが泊まり込むようにしたのは、きめ細かなモニタリングを行ない、村人たちと深く知り合いになり信頼を勝ち取るとともに、一回コミットしたら最後までやり遂げるJVCの意志を示すためでもあった。

での効果が証明された。○五年夏には、水の汚染が原因と考えられる病気(下痢や黄痘など)の全患者に占める割合は三〇%を超えていた。地震直後には冬であったにも関わらず四〇%を超えた。ところがJVCがトイレを設置して以降はこうした病気の割合は一五%を越えることはなくなった。野外排泄や垂れ流し式のトイレが減り、排泄物が生活用水に混入しなくなったためと推測される。

私はこの支援事業を通じて、「支援」とは決して困った人にモノを贈る行為ではなく、NGOと住民が同じ目標——今回は野外排泄から仮設トイレ設置・利用に移行すること——に向けて共同作業をする中で住民の生活改善がなされること、そのためのNGO側の活動を指す、ということを変えて学んだ。トイレは、共同作業の契機となるために必要なものだったのだ。

そして、パキスタン事務所のスタッフたちが生活条件の厳しい(電気や水も止まることが多かった被災地で合宿生活をしながら、最後まで高いモラルを持って活動に取り組んだことを称えたい。また、約一年間の事業期間内には三つの日本の協働団体の方に現地訪問をして頂いた。こういった日本の皆さまの関心の高さが、今回の事業を支え、成功に導いたのだと感謝している。

いかに自立につなげるか

前パキスタン現地調整員

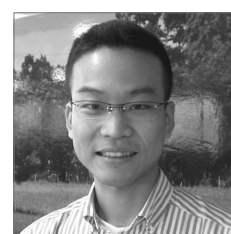
安野修

緊急支援担当

下田寛典



■安野プロフィール
外資系コンピュータメーカー勤務中に国際協力に興味を持ち、農村開発の専門家を目指す。○六年八月～翌一月末までJVC現地調整員。現在は京都大学（東南アジア研究所）研究員。



■下田プロフィール
大学在学中にタイの農村でインターンとして一年間を過ごす。卒業後、JVCに参加、タイ事業と緊急支援担当を兼任。

■三次にわたった支援活動

今回の地震に対する支援活動は第一次～第三次の三つに分けることができる（次ページ表参照）。

第一次支援は、地震直後の○五年十月に実施した。現地パートナー（パキスタンにおいてはSPADO、インドにおいてはATHROT）とともに、現地で被害状況の把握と二

ン板の配布や、毛布、薪ストーブの配給支援をおよそ七十家族に対して行なった。

○五年十一月から第二次支援に移行、パキスタン側では仮設トイレの設置を開始した。数多くの援助機関が越冬対策を行なう中、衛生分野の支援が遅れていたからだ。冬が終わり、気温がぐんぐん上がっていきば衛生環境の悪化はまぬがれない。こうした状況を未然に防ぐ必要があると判断したためだ。インド側では、一次に引き続きトタン板の配給や建築工具の支給を実施した。しかし、インド側ではその後、外国人に対する入域規制が敷かれた影響もあってモニタリングが難しくなり、○五年十一月末で支援を終了した。

■住民自身の手で

○六年二月には現地調整員として藤井が赴任、パキスタン側の被災地バタグラムを拠点に第三次支援活動が始まる。緊急段階を終えたとして多くの援助機関が撤退し

ていくなか、JVCは現地に残った。緊急から復興への移行期に当たるこの時期に撤退すれば、今までのように保たれていた衛生環境のバランスはもうくも崩れ去るのは目に見えていたからだ。

「移行期のこの時期に必要なのは、復興に向けて住民たちが自分の手で何かを成し遂げることだ」。そう考えたJVCは、仮設トイレ設置に住民参加の手法を取り入れた。険しい山岳地帯の中、道なき道を一步一步前進し、粘り強く地域の人々と向き合いながら、まさに地を這うように仮設トイレの設置を進めていった。

■自立復興への手がかりに

トイレ設置事業は、家庭用トイレの設置、学校などの施設へのトイレの設置、衛生指導の三つに大きく分けることができる。トイレ設置支援と平行して、トイレを設置した家の家族（とその隣近所の人）とトイレを設置した学校の生徒に対して衛生指導を実施した。

トイレ設置事業は、結果的に「ばら撒き」を避けることができ、かつ地域の文化にも呼応したものがなかった。特に、事業実施地域では「パルダ」と呼ばれる男女隔離の考え方が強く、外を歩く女性を見かけることさえまれであるが、そうした中で女性性は野外排泄を強いられてきたので、今回のトイレ事業は女性たちに大変喜ばれた。

○六年八月下旬、藤井から安野に交代。その後、被災後二度目の冬を迎えようとしていた十一月に終了評価を実施した。最終的に仮設トイレをリクエストする声に最大限応えるようにしつつ、○七年一月末に現地での活動の終了した。今回の支援を通して住民たちがトイレを手作業で設置していった過程そのものが、何らかの形で住民たちの自立復興につながって欲しい。そんなささやかな願いをJVCは持ち続けている。



■排泄槽の穴掘りはもちろん、上部の建屋の組み立ても住民自身にやってもらった。

ズ調査を実施、双方とも本格的な冬を目前に越冬対策が求められていることが明らかになった。パキスタン側では被災者およそ三百家族に対して、テントと毛布などの支援を実施、インド側では住宅の屋根や壁に使えるトタ

支援活動経過まとめ

日時	パキスタン	インド
2005年10月8日 午前8時50分	地震発生 震源地：カシミール地方（インドとパキスタンの係争地） ムザファラバード付近 （北緯34° 29' 35"、東経73° 37' 44"、深さ26 km） 震度：マグニチュード7.6 死者：73,318人、重傷者：69,392人、 家屋全半壊：400,153棟 (http://www.pakistan.gov.pk/donor/Earthquake.htm)	
		死者：1,309人、負傷者：6,622人、 家屋全半壊：37,607棟 (http://www.ndmindia.nic.in/Earthquake2005/Sitrep on 26Th.doc) 
10月中旬	JVC 清水が現地入り。現地団体 SPADO (Sustainable Peace and Development Organization) とともに、被害状況の把握とニーズ調査を実施。 第1次支援 ・ テントと毛布（約300世帯） ・ 北西辺境州マーンセヘラー 県パラコット市 → 終了 	JVC 下田が高橋氏(ジャンムー大学博士課程)とともに現地入り。現地団体ATH' ROT ("Helping Hand"の意)とともに、被害状況の把握とニーズ調査を実施。 第1次支援 ・ 仮設住宅の建設資材と毛布、薪ストーブ（70世帯） ・ ジャンムー・カシミール州ウリ → 終了 
11月～	第2次支援 ・ 仮設トイレの設置開始 ・ 北西辺境州バタグラム県 ・ 協力団体：SPADO 	第2次支援 ・ トタン板の配布（806世帯） ・ ジャンムー・カシミール州ウリ ・ 協力団体：ATH' ROT → 終了 
11月下旬	JVC 谷山が現地入り、モニタリング	支援終了 （外国人の入域規制の影響もあり）
12月中旬	JVC 下田が現地入り、モニタリング	
2006年1月中旬	JVC 清水・広瀬が現地入り、調査・視察	
2月上旬	JVC 藤井が現地駐在として赴任 第3次支援 ・ 毛布、トタン板の配布（10世帯） ・ 北西辺境州バタグラム県 ・ 協力団体：SPADO → 終了（多くの団体が実施し、流用・横流しなど「ばら撒き援助」の弊害が散見されたため） 	
	※以下、第2次支援であるトイレ設置に関する最終的な詳細データ ・ 家庭用のトイレ設置（最終的に1,196基） 初期：テント式仮設トイレ（400基）、その後：鋼板製組み立て式トイレ（796基） ・ 学校トイレ設置（2007年3月より開始。最終的に70基） 内訳：男子小学校27校、女子小学校36校、モスクが運営する政府認定の小学校3校、 高校4校（他に病院・診療所3カ所、バタグラム県地震復興部にも設置） ・ 衛生指導（2007年2月より開始。最終的に12,929人） 対象：トイレを設置した世帯の家族と近隣の人々および設置した学校の生徒（地域文化を考慮して男女別に実施） 内訳：男性2,117人、女性3,601人、子ども7,211人	
7月	JVC 下田が現地入り、モニタリング	
8月下旬	JVC 安野が現地駐在として赴任（藤井は9月下旬で異動、アフガニスタンへ）	
11月下旬	終了時評価 JVC 清水、下田、藤井、安野が参加	→ 2007年1月末で終了
2007年1月31日	支援終了	

JVC/シェア共同事業 南アフリカ「住民参加型 HIV/AIDS 予防啓発および陽性者支援強化プロジェクト」における協働団体の会計不正に関して

JVC 代表 谷山 博史

日本国際ボランティアセンター (JVC) が、シェア＝国際保健協力市民の会と共同で南アフリカ共和国リンポポ州で実施している「住民参加型 HIV/AIDS 予防啓発および陽性者支援強化プロジェクト」において、昨年 10 月、協働団体 (=カウンターパート) である現地 NGO の TVAAP (Tivoneleni Vavasati Aids Awareness Project) による会計の不正問題が発覚しました。これを受けて、今年度以降の現地での活動体制がこれまでと変わります。問題発生からの経過と対応をご報告します。

■ 会計不正問題の概要

本プロジェクトの活動は、①地域の在宅介護ボランティアの育成・活動支援、② HIV/エイズ予防啓発、③ HIV 陽性者による自助グループ支援、④ エイズ遺児支援、⑤ 家庭菜園研修の五本柱から成り立っています。このうち、①に含まれる在宅介護ボランティアへの手当てについて、TVAAP スタッフによる不正横領が発生しました。TVAAP は、以前より南アフリカ政府保健省から月に七十名分、JVC/シェア^{※①}からそれ以外に二十三名分のボランティア手当を〇六年二月より助成金として受領していました。金額は一人当たり五百ランド/月 (約九千円) です。JVC は手当を TVAAP スタッフ経由で渡し、ボランティア各自がサインした受領書を毎月末に TVAAP スタッフ経由で受け取っていました。しかし、その受領書のサインが本人のものではない可能性が九月中旬に発覚、十月中旬に TVAAP 理事および弁護士同席のもと TVAAP と話し合いを行ないました。その結果、TVAAP スタッフ全八名が横領を認めました。そして、JVC に関する資金横領の状況については、その後の調査の結果、表 1 のように判明しました。

表 1：被害の内容

月	TVAAP が申請・受領した助成金	手当を実際に受け取ったボランティアの人数	TVAAP による横領金額 (R = ランド)
2	93 名分 (内訳：保健省・70 名分、JVC・23 名分)	78 名 (ボランティアの全員：助成申請時から人数を水増ししていた)	R 7,500 (水増した 15 名分)
3	93	78 (ボランティアの全員)	R 7,500 (15 名分)
4	93	80 (ボランティアの全員)	R 6,500 (13 名分)
5	93	79 (ボランティアの全員)	R 7,000 (14 名分)
6	23 ※ 1	0	R 11,500 (23 名分)
7	23	0	R 11,500 (23 名分)
8	93	80 (ボランティアの全員)	R 6,500 (13 名分)

※ 1：6、7 月は、この問題とは別の理由で保健省からの助成金なかった。

JVC 被害額：R23,000 (約 41 万 4 千円)

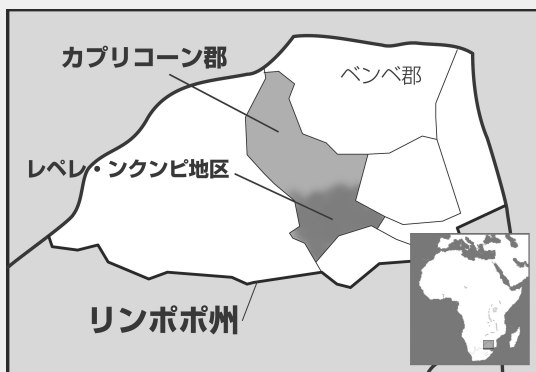
なお、ボランティア手当以外の支出に関しては、JVC がすべて管理 (直接支払い) しているため、今回の会計不正の影響は受けていません。

■ 発覚後の経過

不正発覚後、TVAAP 理事会は新しい会計監査とともに不正の詳細解明にあたってきました。その結果、JVC 以外のドナー (支援者の資金についても、過去数年にわたり多額の使途不明金があることが判明したため、TVAAP 理事会はスタッフ全員を解雇処分しました。現在は、州警察による捜査が進められている段階です。

JVC は、在宅介護研修や家庭菜園研修など予定していた活動を実施する一方、十一月上旬に他のドナー (国際 NGO、南ア政府保健省など) の共同会議を開催し、今回の会計不正問題への対処や TVAAP の組織再生の可能性に関して話し合いを持ちました。しかし、その後も JVC およびシェアの事業関係者間、理事会等での協議を重ねる中で、現体制下の TVAAP の組織再生およびその後の協働に関して、①組織再生への具体的な方策が不明瞭であること、②不正に関連した元スタッフ全員が解雇されており、不正を発見した JVC の日本人現地駐在員の安全性の確保に確信がもてないこと、などの理由から、TVAAP との協働団体としての契約を〇六年度末で打ち切ることにしました。

※注① JVC/シェア：本プロジェクトは両団体の共同事業であるため、以降の「JVC」との記述は、すべて「JVC およびシェア」を意味します。



◆新規活動地域の概要

レペレ・ンクンビ地区は、リンボポ州都ポロクワネのあるカプリコーン郡の南部に位置している農村地域で、郡で二番目に大きい地区です。畜産を含めた農業の可能性が高い地域とされているながらも、まだ十分に土地が活用されておらず、また同地区内にあるブラチナ鉱山でも期待されているほどの雇用が創出されていません。統計によると、地区全体の人口は二十一万八千人で、世帯の六割強が一世帯に最低必要な生活費千三百ランド（約一万六千円）に満たない八百ランド（約一万六千円）で生活しています。

◆新規協働団体の概要

Pholoshong Home Based Careは、元看護師であった現在のダイレクターが、地域の人々の健康状態を良くしたいと願い、〇一年に十五名のボランティアと一緒に在宅介護活動を始めたことがきっかけで結成されました。現在は、①十四名の在宅介護ボランティアによる在宅介護活動、②十六名のボランティアによるエイズ遺児への食事を提供するドロップ・イン・センターの運営、③青少年活動、④クリニックを拠点にしたHIV陽性者サポートグループ支援などを実施しています。

■新たな地区・協働団体

〇七年度以降も同じリンボポ州内で活動するために、今年一月から新たな協働団体を探すための現地調査を開始しました。

いくつかのドナー団体に聞き取り調査を行ない、団体選考基準を設定後、これを満たした十二団体を訪問、インタビューおよび活動を視察を実施しました。その結果、カプリコーン郡で活動しているPholoshong Home Based Care（ポロシヨング・ホーム・ベースト・ケア）という団体との協働を決定しました（上部枠参照）。

この団体との協働を選んだ主な理由は、以下のとおりです。
①活動内容がJVCのこれまでのベンベ郡での支援活動と重なっており、経験を活かして活動を実施

表2：活動の変更点

年度 活動地	～2006年度	2007年度～
ベンベ郡	JVC/シェア (駐在員) TVAAP 活動：①、②、③、④、⑤	トレーニング 機関 (協力継続) 活動：①、⑤
カプリコーン郡	(-)	JVC/シェア (駐在員) Pholoshong 活動：①、②、③、④、⑤

■活動：

①在宅介護ボランティア支援、②HIV/エイズ予防啓発、③HIV陽性者自助グループ支援、④エイズ遺児支援、⑤家庭菜園研修

している可能性が高いこと、②団体規模および活動範囲が適切である（大きくすぎず、今後の拡大の余地がある）こと、③活動の良い面だけでなく、課題をきちんと把握し対処しようとする姿勢があること、④代表者が地区のCBO（市民団体）フォーラムの代表であり、また団体として地域社会と良い関係を築いていること、⑤会計システムの透明性が保たれており、ボランティア自身も団体の財政状況が把握できること、なです。

■今回の件を受けて

JVCは、南アフリカでの活動で、現地NGOと協働することにより、地域内で活動を継続的に担っていく人材を育成していくことが重要であると考えてきました。協働団体の選考基準や具体的な協力のあり方については、これまで

も慎重に検討しながら活動を実施してきましたが、今後さらにこれを改善・適用していく必要性があることを深く認識しています。

また、TVAAPスタッフが活動資金を数年にわたって横領していた事実については、他のドナーと共に、現地NGO支援のあり方や会計監査の方法、ドナー間のコミュニケーションなどを改善していく必要があると考えています。また、外部資金への依存傾向が強

い南アNGOとのより良い協働のあり方も模索したいと考えています。これらの点をJVCの課題として真摯に受け止め、今後の活動に活かしていきたいと思っています。

新規協働団体の名前である「Pholoshong」とは、南アの公用語のひとつであるベディ語で「安全な場所」という意味だそうです。その名前に込められた意味のごとく、地域の人々が安心して集まれる、そんな活動を目指して、JVCはこれからカプリコーン郡での支援を開始していきます。

また、これまで活動を進めてきたベンベ郡においては、これまでに関わりのあるトレーニング機関と協力しながら、引き続き在宅介護トレーニング、家庭菜園トレーニングのフォローアップを実施していきます（表2参照）。

今回の事件は非常に残念なことではありますが、HIV陽性者が最も多い国のひとつである南アフリカが、特に草の根での人材育成や陽性者支援に支援を必要としている状況は変わりありません。今回の困難な状況を乗り越え、今後さらに良い活動ができるよう、南アフリカのHIV陽性者、エイズ遺児、地域で活動する人々に対する支援を続けていく所存ですので、何卒ご理解いただきますようよろしくお願いいたします。



米倉 雪子

(現地代表)

1 現地の人の生計と公共サービス改善のために国際協力の質を良くする。新しい事に挑戦。

山崎 勝

(農業・農村開発担当)

2 農業、農村開発、ログフレーム、PRA/PLA、社会学、哲学、調査などスタッフ育成に注力。

サム・ネアリー

(農業・農村開発担当)

3 インドでの見聞や学び、CEDACに学び実践したことを新活動地で改善し適用する。

リム・キムリー

(農業・農村開発担当)

4 インドでの学びを適用。生計向上のため農業生産をあげ、村が緑になるようにしたい。

ポック・スレイノーン

(農業・農村開発担当)

5 経験を通して、新プロジェクトを現在よりも良くし、これからもより学び続ける。

サーイ・ボラ

(環境教育担当)

6 村人のための情報誌作り。環境教育への参加を増やす方法を見つけ地域を広げる。

パオ・リツ

(運転手、農業・農村開発補佐)

7 より注意して運転し、農業・農村開発プロジェクトの仕事を手伝い続ける。

ノップ・パウ

(TRC/CRC 担当)

8 CRC を全国に。良い報告を迅速に。結婚し行動で一杯の人生にしたい(人生は行動である)。

チューン・ソチエット

(CRC 担当)

9 CRC 計画の達成を成功させたい。全県にCRC を広げたい。

イン・コック・エン

(TRC 担当)

10 使いやすい図書カタログに改善。パンフでTRC 広報。利用者のために良い新書を探す。

ピン・パン

(運転手、TRC/CRC 補佐)

11 より注意して運転する。新車があるとより良いだろう。

ダン・ソン

(警備、TRC/CRC 補佐)

12 より注意して働く。TRC/CRC 図書や総務を手伝うのは嬉しく、最善を尽くしたい。

チン・ブン・ヒェン

(警備、TRC/CRC 補佐)

13 JVC の警備員を続けたい。

ノブ・ティム

(技術学校アドバイザー)

14 移転に向け準備、経営改善。移転先で職員増、顧客促進、内部経営準備等、より良い経営を。

ジット・パニー

(会計・総務担当)

15 仕事があるなら、迅速に行なう。

サー・スイネン

(清掃担当)

16 JVC と共に働き、JVC の家財を大切に保ち、JVC の活動が円滑である事を望む。

新井 綾香

(プロジェクトマネージャー)

17 赴任 1 年目は寄生虫、2 年目は Dengue 熱、3 年目の今年は健康第一で通す。

尾崎 由嘉

(森林担当)

18 ラオ語でコミュニケーションが最大の課題。でも、楽器を学ぶ心の余裕も持っていたい!

クンタノン・バンタノウォン

(アドミ担当)

19 PRA など開発に関する技術を学びたい。

STAFF 2007

今年度の抱負を聞きました。

タイ駐在

堤 由貴

(現地調整員)

26 ついうっかり物を壊してしまう(洗面台とか)。今年は人の物を壊さないよう心がける。

伊能 まゆ

(現地代表)

27 ホアンキエム湖畔で、毎朝毎晩おばちゃんたとエアロビに励み、目指すは 5kg 減!

グエン・カック・フン

(アシスタント・オフィス・マネージャー)

28 IT の技術をもっと学び、プロジェクトの評価についての経験と能力を高めていきたい!

グエン・タイン・フォン

(プロジェクト・アシスタント)

29 英語の力をもっと磨くことと、ウエストをスリムアップさせる!

チャン・クアン・ヒョウ

(インターン)

30 英語力アップ、そして JVC での仕事をがんばって、プロジェクト担当になる。

ファム・ティ・リエン・フォン

(インターン)

31 英語力を強化すること、ベトナム式武道を習うこと、好きな人を大事にすること!

ラオス事務所

ビリー・チャイタチョンチアサイ

(森林担当)

20 海外の国の様々な開発の事例を学びたい。

ブンシン・サナホーン

(農林コーディネーター)

21 家の増築を完成させたい(新しく家族が増えたので)。

マニコーン・テプソンパス

(農業担当)

22 動物の飼育に挑戦してみたい。

フンパン・センチャント

(農業担当)

23 今年 1 年で英語を上達させる。

スックニーダ・スオトキ

(森林担当)

24 森林チームのリーダーとしてリーダーシップを取る。

スワニー・マントンディー

(アドミ担当)

25 子供にラオス語の読み書きを教えたい。

デラワール

(門衛主任)

3月21日からアフガニスタンの新年。今年も安寧に過ごせるように望んでいます。

アガーグル・パーチャ

(門衛・運転手)

今は貸家住まいだが、小さい家を立てて家族と移り住む。

イザトゥッラー

(門衛)

JVCのような良い診療所が自分の故郷の村(ザワ村)にもできると良いのだけど。

アフガン・グル

(清掃・調理担当)

仕事の質を高めます。政府が約束どおり住宅用地を提供してくれるのを待ちます。

アブドゥル・ラーズイク

(門衛・庭師)

貧乏で学校へ行けない2人の息子と3人の娘が学校に行けるよう、JVCで頑張ります。

ナシーム

(医師、院長・一般外来診療担当)

母国アフガニスタンの人々の役にたてるよう、医療技術を向上させたいです。

サマル・グル

(医師、女性外来診療担当)

JVCの活動をしながら、人々の病死を減らす事に奉仕します。

ズルフィカール

(看護師、診療所薬局担当)

自国の発展のため、余暇と睡眠時間を削って仕事と勉強の時間を増やしたいです。

アミー

(看護師)

保健分野で人々のために奉仕したいです。また、憧れの土地を訪ねたいです。

グルソマ

(助産師、母子保健外来担当)

仕事に励みながら、妊産婦と胎児や乳児の死亡率を減らしたいです。

ワグマ

(助産師、地域母子保健担当)

私の業務を通じて、妊産婦の死亡率を下げていきたいです。

ルトッフル・アハド

(臨床検査技師)

自分の持っている技能を、貧しいアフガンの住民の医療サービスに役立てたいです。

ワハーブ

(医師、地域保健トレーナー)

医師として、コミュニティに尊敬される地域保健員を育成したいです。

ファールティマ

(地域保健トレーナー)

パキスタンでの保健衛生教育活動の経験を、JVCでもいかして頑張ります。

フェダー・モハンマド

(ワクチン接種員)

子供たちのために一生懸命活動して、危険な7つの病気を防ぎたいです。

フルシード

(ワクチン接種員)

さらに仕事に真面目に取り組み、未来のアフガンの人々のため頑張ります。

ハビーブ・ラフマーン

(診療所門衛)

素晴らしいアフガニスタンが、平和で安全な国になるよう祈っています。

ジャンナト・グル

(診療所門衛)

昨年婚約を済ませたので、今年中に早く結婚式を挙げたいです。

小林 和香子

(現地調整員)

パレスチナタイムに挑戦。仕事は早朝開始で2時に終わらせ、午後は昼寝&社交タイム。



JVC

アフガニスタン事務所

ファヒーム・アハマド

(会計担当)

良き伴侶と出会い婚約したい。そのためにもアフガンの平和と自己の向上を望みます。

ハミドゥッラー

(井戸・教育担当)

JVCがスタッフの職能向上訓練を始めてくれるのを期待しています。

サービルッラー

(運転手・事務助手)

運転業務を離れ、アドミニスタッフとして事業の運営と安全管理に携わりたいです。

シャー・モハンマド

(運転手)

まずは、アフガンの平和を望みます。それから家の購入を計画しています。

ナビー・ジャン

(運転手)

我らが神のご加護で、平和と復興が進んで欲しいです。

アハマド・ズィアー

(門衛・事務助手)

今年は英語と経営管理を学び、性感染症に関する知識をまとめて本にしたいです。

ベトナム事務所

グエン・ミン・ヒエン

(インターン)

熱意、やる気を維持し、もっと素晴らしい人生を送るためのモチベーションを高める！

ド・ティ・トゥ・フオン

(産休中) (情報・ネットワーク担当)

藤井 卓郎

(現地代表)

活動地ゴレーク村の人々と、パシャイー語の片言で会話できるようになりたいです。

本間 一

(事業調整員)

国際協力はヤクザな稼業。この道20年の節目、人生のリフレッシュに挑みます。

谷山 由子

(女性活動調整員)

帰国報告全国巡業でたくさんの人と話し、内・外面で日本の自分の顔を取り戻したい。

シャプール

(医師、地域医療調整担当)

アフガン人医療チームのリーダーとなるべく、スタッフと協同で頑張ります。

77	壽賀 一仁 (事務局次長)
	農や自然、そして地域の人々とのかわりが事務所の仕事の中で増えるような業務改革！
78	香取 佐和子 (経理担当)
	分割睡眠を改め、連続睡眠6時間を目標に早寝早起きに努める。
79	鈴木 まり (カンボジア担当)
	「シジョウゲンリシュギグロバリゼーション」を小学生にすんと落ちる言葉で話す。
80	川合 千穂 (ラオス・ベトナム担当)
	ラオス、ベトナム兼任で超多忙。念願はバスサバッサと仕事し、余裕の笑みを浮かべる。
81	渡辺 直子 (南アフリカ担当)
	早寝早起き (特に後者)。
82	下田 寛典 (タイ担当)
	タイで家造りをします！ 自分の家ではないけど、第二の故郷に向けて一歩前進！
83	長谷部 貴俊 (アフガニスタン担当)
	机の上と自宅の部屋と頭の中の整理整頓。
84	藤屋 リカ (パレスチナ担当)
	久しぶりの定住生活。遊牧民から農耕民へ変身。ベランダで堆肥と野菜作りに励む。
85	寺西 澄子 (コリア・会員担当)
	K員担当の基本「明るく元気に愛想良く」を徹底。そうすればKリア事業にも春が来る？
86	高橋 清貴 (調査研究担当)
	JVCで10年。その間、国内で格差問題が深刻に。今年は足元の問題も取り組みたい。
87	エミリー・パーキン (リサーチャー)
	初めてマラソンを走る！
88	細野 純也 (会報誌レイアウト・総務担当)
	Ajax、Google 関連、CMSなど、いままながらハヤリに乗る。個人でもblog開設を。
89	広瀬 哲子 (広報担当)
	走る！ 今年はハーフマラソンに挑戦。そのために走りながら水を飲めるようにする。
90	荻野 洋子 (カレンダー事務局)
	アフリカン、ブラジリアン、タイ…踊りまくり、売りまくりです！ カレンダー2008！
91	石川 朋子 (コンサート事務局)
	1日1回整理整頓 → 出したものはしまう、いらぬものは捨てる、たまに掃除する。
92	津山 直子 (現地代表)
	自分の体は自分で労わり、大事にしていこう。子どもたちとハイキングに行きたい。
93	青木 美由紀 (HIV/AIDS 担当)
	リンパで出会った素敵な人々との出会いを英語と日本語の本にまとめたいなあ。
94	ティム・ウィグリー (自然農業専門家)
	自然農業の実践の成果を多くの人と共有し、自然と共生し生産する生き方を広げたい。
95	ドゥドゥジレ・ンカビンデ (アドミ担当)
	エイズによる死が減るように、自分ももっと知識を得て、活動にいかしたい。

東京事務所

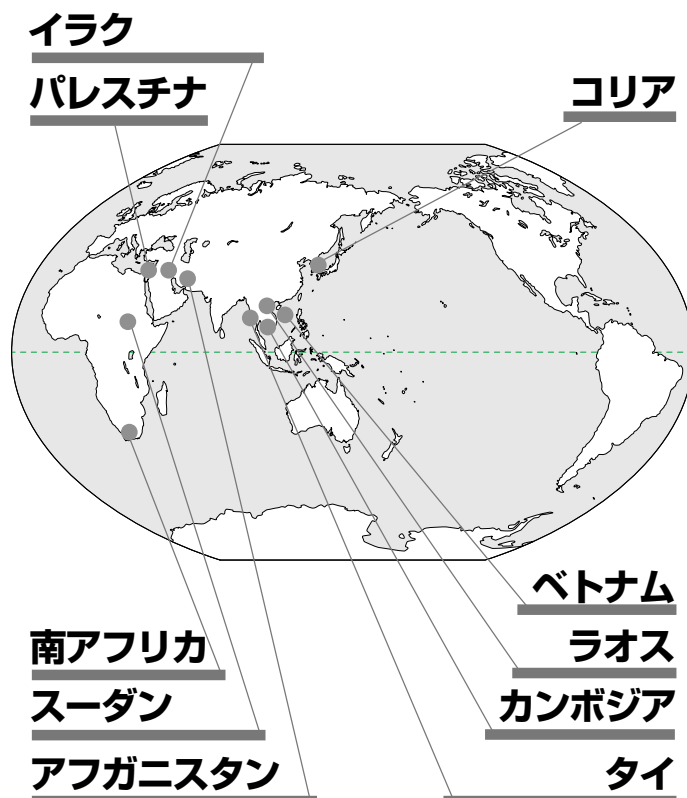


スーダン事務所

70	モーゼス・マンザ (メカニック)
	今は貸家住まいだが、小さい家を建てて家族と移り住む。
71	グリーン・スコープス (会計担当)
	7人の子供にしっかり教育を受けさせること、より良い生活を与えること。
72	フォエベ・ドゥドゥ (事務担当)
	パソコンをもっとうまく使えるようになる。
73	アンドレア・ワニ (門番)
	子供の教育費をなんとかして払う。
74	谷山 博史 (代表)
	NGO 関係者以外の様々な人々と知り合う。でも外食をなるべく減らしたい。
75	磯田 厚子 (副代表)
	JVC の農村開発の多くの経験・教訓を取りまとめて更に深化・進化させたいです。
76	清水 俊弘 (事務局長)
	オタワ条約成立から10年、JCBLとしてクラスター爆弾全面禁止に向けて頑張ります。
63	岩間 邦夫 (現地調整員)
	時差にも負けず、門前払いにもくじけず、逆境にも屈せずに資金調達。
64	井谷 正吾 (車両整備専門家)
	マラリアにも負けず、黄熱にも負けず、脳膜炎にも負けずに生き残る。
65	サイモン・シキ (工場長)
	インジェクション・ポンプ修理のための特別研修を受けたい。
66	ビタレ・オケッチ (プロジェクト・アシスタント)
	生活環境改善のための給与アップ、工具と修理用部品の充実、スタッフの技能向上。
67	サムエル・オリン (溶接工)
	避難している家族と一緒に暮らせるようになる。
68	スタンレー・ドゥック (電気技師)
	工場の再建とスタッフの技能レベルアップ。
69	アレックス・アムレ (メカニック)
	給与は低く手当は無くなったので、今年は自分と家族にとって厳しい年になる。

※注① JCBL：地雷廃絶日本キャンペーン。90年代に、署名活動などを通じてオタワ条約(対人地雷全面禁止条約)に日本政府が署名・批准することを後押ししたNGOであり、清水はこの運営委員を兼ねている。

JVCは、現在10の国／地域で活動しています。



タイ

■スマトラ島沖津波

被災地支援

タイ南部で復興支援を実施。被災した在タイビルマ人労働者の子どもや教師への健康教育支援では、今年1年で得た知識の定着を測るべく最終テストを行なった。ビルマ人遺族への遺体返還政策キャンペーンに関しては、ビルマ人遺族約250名への調査を元に、2月15日「津波後の在タイ外国人労働者：教訓と経験、そして政策提言へ」というセミナーを開催した。各政府関係者、NGO関係者、在タイビルマ人が参加し、幅広い議論を行なった。また、セミナーにあわせ、被災したビルマ人遺族の生の声をまとめた本と、政府への提案をまとめた本を出版した。2月15日から3月5日にかけて各プロジェクトの評価活動を行なった。(堤)

■交流・ネットワーク

05年度で終了した東北タイでの活動のその後の動向を追うことを目的に、関係者との交流を続けている。2月はじめ、タイのNGOスタッフと広島県のお百姓さんとの交流を実施し、アテンドへの協力をした。(下田)



■津波後の在タイ外国人労働者に関するセミナーを開催した。

カンボジア

■持続的農業と農村開発 (SARD)

安全な水や食糧の確保をめざして活動。カンダール県でのグループ活動は村人が担い自立し、農業研修のみCEDACにより継続している。シェムリアップ県20ヵ村で調査と農業研修。JVCインドシナ3カ国スタッフが集い、環境保全型農業活動の方針を協議。(米倉)

■資料・情報センター (TRC)

持続的農業、農村開発の資料を提供。農村部への展開をめざしバタンバン県とバンテイメンチェイ県の刑務所の図書館に農業実践書を寄贈。(米倉)

■技術学校

ブノンペンで自動車修理の職業訓練校と付設整備工場の運営強化。移転先の建設工事について関係者と会議を継続。(米倉)

■調査研究・政策提言、ネットワーク

日本大使館／JICA／JBIC／日本NGO(ENJJ)の分科会で公用地の住民の権利について学習会開催。JBICによるシアヌークビル港拡張工事と住民立ち退きに関して大使館に照会。(米倉)



■国立公園の研修に参加した先生たちに環境のコンセプトを説明。



アフガニスタン

■女性と子どもの健康改善 支援(ナンガルハル県)

◎診療所支援：保健省への登録更新と今後2年間の活動契約を締結。医療スタッフを病院マネジメントなどの研修

に派遣。また、医薬品や検査試薬3～5月分を購入し配備。

◎地域保健員(CHW)・伝統産婆(TBA)支援：診療所管轄地域でこれまでCHWが不在だった村で男女7名のCHWに初期研修を行ない、これで管轄全村にCHWが配置されたことになる。母子保健を担う助産師を3月に採用し、出産助産キット支給と相談活動を再開。CHWはワクチン接種などにも参加。(本間)

■教育支援(ナンガルハル県シェワ郡)

シギ女子学校を含むシェワ郡内の小学校の教師約70名(全体の半数以上)を対象に、新教師用指導書に基づく教授法の研修を実施。この研修を大都市以外で実施するのは初の試み。(本間)

■政策提言・ネットワーク

1月の安倍首相によるアフガンスタンでのNATOへの協力発表を受け、日本のNGO有志で政府への公開質問状を送った。カブールでの大使館・NGO懇談会、国内での外務省・NGO意見交換の場で、NATOへの協力についての危惧を表明。(長谷部)



■ワクチンキャンペーンに参加するCHW(左)。



ラオス

■森林保全

村人の生活を支える森を守る活動を行なっている。1月には森林ボランティア交流会を開催。旧森林ボランティア(6村)と新森林ボランティア(8村)が村レベルで起きている土地・森林にまつわる問題を議論することができ、またカムアン県農林局にとっては、村の末端で起きている実情と村人の声を聞く良い機会となった。同月、ラオス北部における森林管理の現状を見るべく、ルアンパバーン県へのスタディーツアーも開催した。(新井)

■複合農業・生活改善

十分な食料を確保するため、稲作改善や家庭菜園などを行なっている。ドンドゥー村とブンファナーカン村の幼苗一本植(SRI)の稲は十分な日の光を浴び1株が50株にまで分結、現在は花をつけるまで成長した。水支援では、2村で井戸の建設を開始、掘削とセメントリングの作成を開始している。また、4月上旬に行なわれる評価に備え、森林、複合農業・生活改善事業の双方で中間評価のための情報収集も合わせて開始した。

(新井)



■「村の土地問題をどう解決できるか」行政官と村人が話し合う。



南アフリカ

■環境保全型農業

(東ケープ州)

安定した食料生産と農村地域の復興を目指し、環境保全型農業の研修と普及を実施。実践農家の畑のモニタリング

や8カ村の篤農家による経験交流をした。また、各村で「農民から農民へ」環境保全型農業を伝授していくことの進行状況について聞き取りを実施した。桃の収穫期で、環境保全型農業の実践により桃が害虫の被害にあうことが少なくなった農家では、立派な桃が獲れてよい収入を生んでいる。(津山)

■HIV/エイズ(リンボポ州)

感染予防、在宅介護、HIV陽性者およびエイズで親を亡くした遺児への支援を実施。在宅介護ボランティア研修では、「応急処置」、「研修内容の振り返り」を行ない、5月に卒業テストを実施予定。家庭菜園研修は、畑での実践が認められた9人が卒業し、今後地域でトレーナーとなるための研修コースを実施した。

また、新パートナー団体を選ぶための調査を行ない、Pholoshong(ポロショング)という団体に決定し、活動地域の現状把握調査を実施した。(青木)→関連情報を6,7ページに。



■たわわに実った桃の実を収穫するローマ村の女性たち。



ベトナム

■農村開発(ホアビン省)

北西部ホアビン省における活動は、現在、第1フェーズ延長期の3月末の終了を迎えている。1月に村人、村づくり委員会、カウンターパートであるタンラック郡行政と共

に活動の成果と課題を明らかにする評価会合を開催。活動の中心であるバクソン村とナムソン村では評価の結果について、村人と村づくり委員会による活発な意見交換が行なわれた。主な成果は、堆肥により作物の収量増加につながったことや、土壌流出を防ぐ等高線農業の効果を多くの人が実感し、応用している点が挙げられた。また、村づくり委員会を軸とした活動の成果と課題も明らかになった。今後の活動に活かしていく。(伊能)

■自然資源管理(ソンラ省)

山岳部の少数民族の人々とともに実施してきた活動はこの3月末に終了する。1月に終了時評価会合を実施した後は、トゥアンチャウ郡人民委員会によってフォローアップが続けられている。ホアビン事業の終了時評価会合にはトゥアンチャウ郡行政スタッフも参加し、経験交流を行なった。(伊能)



■「堆肥を使う前はイネの成長が良くなかったね」活動による変化を話し合う。

イラク

■ガン・白血病医療支援

◎病院への医薬品提供：イラクの小児ガン・白血病の医療機関で依然として不足している医薬品を、JIM-NETのネットワークで提供している。治安悪化が進み、医師の病院への通勤にも支障をきたしているとのこと。治安の悪化でバクダッドの病院では患者が減り薬品の供給量が減った一方、北部のモスルや南部のバスラの病院では供給量が増えている。バクダッドまであえて患者が来なくなったためと考えられる。（谷山）

◎政策提言：小児ガンの治療薬の供給状況に関する報告を昨年10月末にまとめたが、その英訳版を作成し、イラク支援に関わるNGOのネットワークであるNCCIと共有した。（谷山）

■その他

3月上旬、イラク支援の拠点であるヨルダンを谷山が訪問。ヨルダンにおけるイラク難民の妊婦に対する支援に関する協議と、増え続けるイラクの国内避難民への支援の可能性を調査。国内避難民は親戚などの住むコミュニティに吸収されるケースが多いが、受け入れ側のコミュニティ自体も疲弊しているために、国内避難民とコミュニティへの一体支援のニーズが高い。（谷山）



■イラクへ送りだす薬をヨルダンで準備。

パレスチナ

■ガザ緊急支援

ガザのNGOによる栄養失調児への栄養食提供と母親への栄養指導の支援。栄養センターに通う子どもたちの栄養状態の改善が進む。1月から公務員の給料支払いが再開し、3月末で緊急支援終了。（小林）

■幼稚園児栄養改善支援

ガザ地区で牛乳とビスケットを園児500人に提供。一時ガザへの牛乳の持ち込みが遅延し在庫切れが懸念されたものの、すぐに再開。（小林）

■トラウマ（心的外傷）を持つ子どもたち治療支援

ベツレヘムの特別学校での言語療法を支援。1月からは仔犬が仲間入りし、子どもたちの癒しに貢献している。（小林）

■子どもの文化・教育支援

ベツレヘムの難民キャンプのハンダラ文化センターを支援。2月は日本人の訪問が相次ぐ。デブカ・ダンス教室は、小さい子どもたちのチームも結成し来客に披露。（小林）

■巡回診療支援

エルサレムの医療NGOによる巡回診療・保健指導を支援。医療サービスの受診が困難な子どもへの健康診断が中心。（小林）



■ガザの幼稚園でビスケットを食べる園児たち。500人に届く。

コリア

■絵画交流（国内巡回展）

韓国・日本・北朝鮮の子どもたちによる絵画展「南北コリアと日本のともだち展」は、クロスパルにいがた（新潟市）での巡回展をもって今年度の事業を終了した。

2月17～25日に開催された「にいがた国際映画祭」にあわせて、会場ロビーで行なわれた絵画展。今回上映された「ディア・ピョンヤン」と「ヒョンソンの放課後」とともに、「新潟はよくも悪くも北朝鮮との縁について考えずに過ごすことはできない。北朝鮮の人びとの暮らしに目を向けるきっかけになれば」という映画祭実行委員の思いによって実現した。

最終日には、映画上映後にトークショー「ピョンヤンの子どもたち」が行なわれ、「ともだち展」実行委員と、協力者の朝鮮学校教諭がゲストとして出演した。会場からは「拉致のことを映画に出てくるような平壤の普通の人びとはどう受け止めているのか」といった質問のほか、「お互い情報の少ない中で、子どもの頃から交流を重ねることは重要だ。もっと広く国内で開催してほしい」との感想が寄せられた。（寺西）



■にいがた国際映画祭のロビーに子どもたちの絵が展示された。

スーダン

■帰還難民支援（南部）

自動車整備工場で10名の研修生に対しトレーニングを実施しつつ、国連車両の整備を行なっている。2月に東京事務所から事務局長・清水と

広報担当・石川が視察。その2名も交えて協議し、本活動の到達目標を2年間の間で自動車整備工場を再建しつつスーダン人自動車整備士を養成することと定めた。そしてそのための講義カリキュラムを整えた。また06年同様、07年も本活動をUNHCRとの共同事業として実施する契約をUNHCRおよび南スーダン政府と締結した。（岩間）

■井戸づくり支援（ダルフル）

昨年10月に西ダルフル州の州都近郊の3村で、協力団体イスラミック・リリーフにより井戸が設置された。その視察のため、2月始めにハルツームまで行き日程を組んだが、現地での治安悪化のために視察は延期することにした。（岩間）



■熱心に講義を受ける研修生たち。講義と実地研修が行なわれる。

中!

表に就任した谷山博史。
ます。2月は新潟と福岡



■JVC 会員が3名も並んだパネルディスカッション（福岡にて）。

国内ひろば

JVC network

新代表のまいた種 地域から地球へ

新潟国際ボランティア センター（NVC）

面川 雅博
おもかわ まさひろ

八九年、当時JVCラオス駐在代表だった谷山新代表が新潟大学や公民館などで行なった講演を聴き、ラオスの実情を知った市民がチャリティーバザーを開催。新潟国

新潟・講演会

「ニイガタに問う
〜八〇万人が世界のため
にできること〜」

際ボランティアセンター（NVC）は、それをきっかけに誕生しました。会員は学生から社会人まで様々な年代のメンバーで構成されています。新潟県内の大学のサークルなどとの交流も活発で、私自身がNVCに関わったのも、サークルでバザーに参加したことがきっかけでした。

今回、谷山代表の代表就任に際して「ニイガタに問う〜八〇万人が世界のためにできること〜」と題した講演会を二月二十五日にクロスパルにいがたにて開催しました。四月一日に新潟市が政令指定都市へと移行することにちなんだ演題です。今回の講演会は、学生が中心となって企画しました。

谷山代表には、アフガニスタンでのご経験を踏まえて復興支援現場の実践について講演していただきました。会場からの「新潟が何をできるか」という質問に対し、「たとえば新潟は震災の経験者。その経験と海外での自然災害の経験は共有できる面がある。復興のためにこういった支援が必要か、強い地域のつながりを作るためにはどういう日々の取り組みが必要か、こ

いったことが新潟から発信できるのではないかと提案され、会場の方々も感銘を受けていた様子でした。

当日は講演会のほか、新潟市内在住の留学生との料理会・交流会も行ないました。留学生と一緒に各国の料理を作り、交流会でその試食を楽しみました。また、交流会では新潟大学の留学生と新潟大学国際ボランティアサークル有志がソーラン節を披露し、大変な盛り上がりを見せました。

現在、大都市圏以外の地域ではNGO活動があまり活発でないのが実情と聞きます。NVCは谷山代表の講演をきっかけに誕生しましたが、新潟のような地方都市でも十八年にわたって活動が続けることができている。私は他の地域でもこういった活動は可能だと思えます。JVCには、NGO活動の活発でない地域への働きかけをもっとしてもらいたいと考えます。

NVCも今回の講演で自分たちの原点を振り返ることができ、また新たな刺激を受けました。今後も、谷山代表にまわっていた種から育てた活動を、もっと成長させていきたいと思えます。

新潟国際ボランティア センター（NVC）とは

国際協力・地域社会における国際理解・人材育成に寄与することを目的とする非営利の市民団体です。JVCラオスとの共同事業のほか、独自にベトナムの小学校建設やバングラデシュでの教育事業を行っています。また、国内では毎年秋に開催する「愛のかけ橋バザー」、新潟市内在住の私費留学生への国民健康保険料助成事業などを行っています。JVCの会員団体でもあります。



■ソーラン節を披露したメンバーに囲まれる谷山（新潟にて）。

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税の優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先
をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

1月計 1,983,262 円

2月計 641,536 円

	1月	2月
無指定	703,974円	260,557円
タイ	10,000円	5,000円
(津波被害)	1,963円	0円
カンボジア	103,000円	10,500円
ラオス	1,000円	26,200円
ベトナム	1,000円	2,500円
南アフリカ	82,000円	10,000円
パレスチナ	374,599円	125,500円
アフガニスタン	263,980円	85,000円
コリア	22,000円	2,000円
イラク	261,746円	84,279円
スーダン	58,000円	30,000円
パキスタン地震	100,000円	0円

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

1月計 225,000 円 / 24 件

2月計 192,500 円 / 21 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としを利用する手軽な募金方法です。

1月計 1,377,000 円 / 1,167 件

2月計 1,376,500 円 / 1,196 件

編集後記

別れと出会いの3～4月。東京事務所の
インターン修了生からは、「会員サービス
充実を！」の提言あり、「スタッフが暖か
かった。支えて下さってありがとう」の涙
あり、一緒に成長(?)させてもらった私も
感無量。スタッフにはあつという間の一年
も、インターンには紆余曲折ある長い道。
新しいインターンにも、「ここで一年を過
ごして良かった」と振り返ってもらえるよ
う、様々な機会を提供していきたい。(テ)

新代表の谷山が、全国を巡業

アフガニスタンにおける四年の駐在を終え、昨年11月に新代
日本国内での「現場感覚」を取り戻すべく、各地に出かけてい
で講演を行ないました。

九州大学国際ホールにて二
月十八日に行なわれたシンポ
ジウムは、第一部に谷山の講
演、第二部はパネリストに J
VC九州ネットワーク(Qネッ
ト)代表の重田康博氏、明日の
カンボジアを考える会元代表
の藤田一枝氏、九州大学大
学教授の山下邦明氏をむかえ、
コーディネーターに安村妙氏
を交えたパネルディスカッ
ションが行なわれました。三
時間に及ぶシンポジウムで、
百名ほどの参加がありました。

福岡・シンポジウム
「NGOの歩み・未来・地域
展開を考える
紛争をなくすために、
私たちにできること」

新スタッフ紹介

おさき
ゆか
尾崎 由嘉

ラオス・カムアン事業
森林担当



多様な生態系を支える
天然林が、急激に世界各地
で減少しています。そんな
中で、住民が森林利用権を
確保して利用しながら、自然環境を維持する
JVCラオスの活動を知り、少しでも役立ち
たいという思いでスタッフに応募しました。
これまで環境保護の視点で活動してきた経
験がありますが、分野を越えて、地域や国際
レベルのネットワークづくりなどから貢献し
ていけたらと思っています。まずはラオスに
知ることから走りだす身ですが、みなさんに
「もっとラオスのことを知りたい」と感じて
もらえるような発信も努めていきたいと思
います。

2006年冬募金にご協力くださり、 ありがとうございました。

日本では例年にも増して暖冬だったこの冬、JVCは、変動する政治経済
や生活基盤の不安定さのなかにいる多くの人たちとともに、今も各地で
様々な活動が続けています。どのような場所・環境にあっても、そこに
住む人たちの視点に立ち、明日に続く生活を支えたい。この冬は、
1,200万円を超えるご支援をいただきました。

2006年冬募金合計

1,665名 12,423,243円

[募金額の20%以内は管理費とさせていただきます。また、上記冬募金
の金額は、ページ左上のJVC募金の欄には含まれておりません。]

会員専用ページパスワード(3～4月) →→→

Jy84BrWc3M

※ JVC ホームページの会員専用ページでは、T&Eのバックナンバーを順次公開
中です。現在、この作業を手伝って下さる方を募集中。細野までご連絡を！

特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター

第8回 JVC 会員総会のお知らせ

日時：2007年6月9日（土）10:00～12:00

会場：豊島区立生活産業プラザ『ECOとしま』 多目的ホール

議案：1) 2006年度活動報告および決算報告

2) 2007年度活動計画および予算案



午後（13:00～15:00）、交流会「JVCのつどい」を企画しておりますので、ぜひご参加ください。
※参加される場合は昼食をご持参ください。詳細は、6月初頭に別途お送りする議案書に
同封/記載いたします。



日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回の会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
- ◎学生会員 5,000円
- ◎団体会員 30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

会員数（4月3日現在）合計 1,332人
（正会員 630人 賛助会員 702人）

■オリエンテーション(説明会)へお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。
（無料。予約不要です）

第1月曜日 午後7:00～8:30

第2・第4土曜日 午後2:00～3:30

※会場はJVC東京事務所です。

■E-mail

info@ngo-jvc.net

■ホームページ

<http://www.ngo-jvc.net/>

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。